

熊谷市合羽山遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

合 羽 山 遺 跡

2 0 0 9

埼玉県熊谷市合羽山遺跡調査会

熊谷市合羽山遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

合 羽 山 遺 跡

2 0 0 9

埼玉県熊谷市合羽山遺跡調査会



序

平成17年10月1日、熊谷市、大里町、妻沼町の一市二町が、さらに平成19年2月13日、江南町と合併して、新『熊谷市』が誕生いたしました。

新『熊谷市』は、南北約20km、東西約14kmにわたり、面積は159.88km²、人口は20万人を超えることとなり、県北最大の都市として生まれ変わりました。

新市は、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の2大河川が最も近接する流域に位置し、平坦な地形に肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、新市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、平成20年度に発掘調査を行った、合羽山遺跡について報告するものであります。遺跡からは鎌倉時代の墓跡が発見されております。類例の少ない資料や、埋葬状況などが判明し、多大な成果が得られました。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りました富士電子株式会社、並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

熊谷市合羽山遺跡調査会
会 長 野 原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市成沢字静簡院前 1162 番地他に所在する合羽山遺跡（埼玉県遺跡番号 65 - 026）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は倉庫建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市合羽山遺跡調査会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第 I 章 3 のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成 20 年 4 月 10 日から平成 20 年 4 月 30 日までである。
- 5 発掘調査及び報告書執筆・編集は、熊谷市教育委員会蔵持俊輔が行った。また、熊谷市教育委員会社会教育課の職員の支援を受けた。
- 6 発掘調査及び遺物の写真撮影は、蔵持が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々及び期間などからご教示、ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

浅野晴樹 磯野治司 伊藤宏之 江原昌俊 内田勇樹 栗岡真理子 菅谷浩之 野口達郎 松井一明
村山卓 森田安彦 諸岡勝 足利市教育委員会文化課 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課
（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県立嵐山史跡の博物館

凡 例


本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

調査区全測図…1 / 80 埋葬遺構平面図…1 / 40 土坑…1 / 30

トレンチ断面図…1 / 60

- 2 遺構挿図中のスクリーントーン等は次のとおりである。

 = 地山

- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土器・陶磁器・鉄製品…1 / 4 石製品…1 / 4

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

実測図の中心線は実線で示している。釉薬がみられるものについては、その範囲を一点破線で示した。

- 6 遺物拓影図のうち、向かって左に外面、右に内面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。() が付されるものは推定値、<>が付されるものは現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で、含有量の多い順に示した。

A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物

質 G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒

N…礫 O…繊維

- 8 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局編集、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目次

口 絵
序 文
例 言
凡 例
目 次

I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	9
1 調査に至る経過	1	1 周辺の地形について	9
2 発掘調査・報告書作成の経過	1	2 遺構	9
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2	3 遺構外出土遺物	14
II 遺跡の立地と環境	2	V 調査のまとめ	24
1 合羽山遺跡周辺の地理的環境	2	1 遺跡について	24
2 合羽山遺跡周辺の歴史的環境	2	2 羽釜について	24
III 遺跡の概要	7	3 埋葬施設について	25
1 調査の概要	7	4 まとめ	26
2 検出された遺構と遺物	7		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	3	第12図 第1・2号土坑	14
第2図 周辺遺跡分布図	5	第13図 遺構外出土遺物(1) 中世土器・陶磁器・石製品	16
第3図 調査地点位置図	7	第14図 遺構外出土遺物(2) 板碑1	18
第4図 調査区周辺地形図	8	第15図 遺構外出土遺物(3) 板碑2	19
第5図 第1・2トレンチ土層図	9	第16図 遺構外出土遺物(4) 石造物1	20
第6図 調査区全測図	10	第17図 遺構外出土遺物(5) 石造物2	21
第7図 集石部土層図	10	第18図 遺構外出土遺物(6) 古代・縄文	23
第8図 集石検出状況	11	第19図 羽釜の工具痕	24
第9図 蔵骨器出土状況	11	第20図 渥美壺検出状況復原	25
第10図 第1号墓壙	12	第21図 第1号墓壙模式図	25
第11図 第1号墓壙出土遺物	13		

挿表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	5	第4表 遺構外出土遺物観察表(2)	19
第2表 第1号墓壙出土遺物観察表	12	第5表 遺構外出土遺物観察表(3)	22
第3表 遺構外出土遺物観察表(1)	17	第6表 遺構外出土遺物観察表(4)	23

図版目次

図版1 調査区全景(北東から) 調査範囲全景(東から) 試掘トレンチ 土層断面 第1トレンチ 土層断面 第2トレンチ 土層断面 集石部検出状況	常滑焼壺 出土状況(北から) 集石部羽釜 出土状況(南東から)
図版2 集石部板碑出土状況(北から) 第1号墓壙 検出状況1(東から) 第1号墓壙 検出状況2(北東から) 第1号墓壙 土層断面(北東から)	図版3 遺構外出土遺物 第13図-1 遺構外出土遺物 第13図-2 第1号墓壙 第11図-1
	図版4 第1号墓壙 第11図-2・3・4・5・6・7 遺構外出土遺物 第13図3~11
	図版5 遺構外出土遺物 第14図1~2、第15図3~6
	図版6 遺構外出土遺物 第16図1~4、第17図5~9、 第18図1~25

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成20年3月7日付けで富士電子株式会社 代表取締役中込秀明氏より熊谷市教育委員会教育長あてに、熊谷市成沢地内の倉庫建設予定地における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて協議があった。熊谷市教育委員会では現地確認をしたところ、予定地の山林は切拓かれており、抜根により、河原石や板碑等が散乱する状況であった。3月17日に試掘調査を実施したところ、さらに板碑、集石遺構が遺存していることが確認された。この結果を踏まえて、平成20年4月4日付け熊教社発1014号にて熊谷市教育委員会教育長より富士電子株式会社 代表取締役あてに次のように回答した。

建設予定地は埋蔵文化財包蔵地（合羽山遺跡）である。当該地は現状保存を行うか、埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により事前に埼玉県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

その後、保存策について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。

事業主と具体的な協議を重ねたところ、早急に建設を開始したい意向があったが、調査実施には9月定例議会での9月補正予算の承認が必要であり、約半年の待機期間が発生する状況であった。そこで、熊谷市教育委員会では、工事の進捗に配慮し早急に発掘調査を実施するため、平成20年4月8日付けで熊谷市合羽山遺跡調査会を設立し、発掘調査を4月10日から実施した。

発掘調査に先立ち、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が富士電子株式会社 代表取締役より提出され、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、平成20年4月24日付け教生文第4－15号で発掘調査実施について指示通知があった。

熊谷市合羽山遺跡調査会会長は、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく発掘調査の届出を平成20年4月10日付け熊合遺発3号で提出し、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、平成20年4月30日付け教生文第3－7号で発掘調査について通知があった。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

合羽山遺跡の発掘調査は、平成20年4月10日から平成20年4月30日にかけて行った。調査面積は、倉庫建設によって破壊を受ける100㎡であった。

遺物が地表に露出し、遺構確認面が浅かったため、人力による掘削を開始し、順次遺構の精査を行った。4月30日には調査区全景の写真撮影を行い、器材等を撤収して現場における作業を終了した。

(2) 整理・報告書作成作業

整理作業は平成20年7月1日より開始し、遺物の洗浄・注記・復元実測作業、遺構の図面整理、遺構・遺物図面のトレース作業・図版組み、遺物写真撮影、遺構・遺物写真の図版組みを行い、12月に原稿執筆・割付を実施した。翌年1月に報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月31日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主 体 者	熊谷市合羽山遺跡調査会
会 長	野原 晃（熊谷市教育委員会教育長）
理 事	菅谷浩之（熊谷市文化財保護審議会会長） 大山整治（熊谷市教育委員会教育次長）
監 事	小柴 清（熊谷市文化財保護審議会委員） 小林常男（熊谷市教育委員会教育総務課長）
事務局 長	関口和佳（熊谷市教育委員会社会教育課長）
事務局次長	吉田高一（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事）
事務局員	金子正之（熊谷市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長） 寺社下博（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査） 蔵持俊輔（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任）

II 遺跡の立地と環境

1 合羽山遺跡周辺の地理的環境

合羽山遺跡は、熊谷市成沢字静簡院前 1162 番地他に所在する。荒川中流域右岸の江南台地の北縁部にあたり、荒川の南約 2.5 km に位置する。また JR 高崎線熊谷駅からは、西南へ約 4.1 km に当たる。

熊谷市域は、利根川と荒川の 2 大河川が流れ、西部が櫛引台地上、荒川以南が江南台地上に位置し、南端は和田川を境に比企丘陵に跨る。また、市域の大半は新荒川扇状地（熊谷扇状地）及び、市域の北部から北東縁にかけて、利根川によって形成された妻沼低地が広がっている。

本遺跡は、江南台地の崖線から南西方向へ入り込む開析谷より形成された、東側へ舌状に伸びる段丘上に所在し、標高は中央から西端が高く 49 m であり、東端の 47 m へ向かって緩やかに傾斜する。遺跡の規模はおよそ南北 250 m、東西 250 m であり、舌状の段丘が範囲に含まれる。

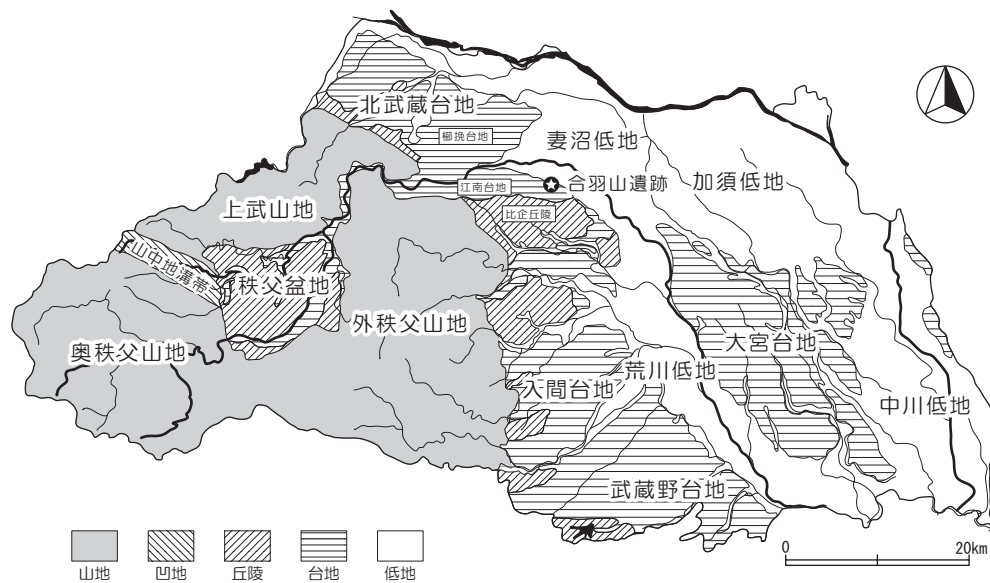
調査地点は、江南台地崖線部に並行する和田吉野川から約 450 m 入った、小支谷に挟まれた段丘頂上付近の標高約 49 m の地点に位置する。

2 合羽山遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡の所在する江南台地には、旧石器時代から営みの痕跡が残されており、増減を繰り返しつつ今日まで至っている。本遺跡は、江南台地に並行して東流する和田吉野川右岸に立地することから、本流域を中心として、本遺跡周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代は、萩山遺跡 (4)・向原遺跡 (16)・本田東台遺跡 (31)・塩西遺跡・鹿嶋遺跡 (23) からナイフ形石器、寺内遺跡・上前原遺跡 (7)・向原遺跡・天神遺跡・山神遺跡・西原遺跡で槍先形の尖頭器が検出されている。また、上前原遺跡から非北方系の細石刃核が出土し、深谷市（旧・川本町）に北方系細石刃を出土した白草遺跡がある。

縄文時代の遺跡は、特徴として江南台地上を中心に、早期と中期後半の遺跡の増加傾向が確認される。



第1図 埼玉県の地形図

調査により遺構が確認された遺跡について概観する。

草創期は萩山遺跡で有舌尖頭器や爪型文土器が確認されている。

早期の遺跡は江南台地東部に増加が見られる。県内でも有数の集落跡といえる萩山遺跡において、スタンブ型石器を200点以上検出している。また、船川遺跡(39)では、竹之内式と称される貝殻沈線文土器が出土し、山形押型文土器・無文土器との共伴関係が確認されている。他には鹿嶋遺跡・宮脇遺跡(29)・南方遺跡で擦糸文期後半の住居跡が検出されている。このように、集中して早期の遺跡が確認されることは、江南台地の地形が当時の生活環境に適したものであり、本地域の特色といえる。

前期になると遺跡は江南台地西部に移り、市内では富士山遺跡で諸磯期の住居跡を3軒確認するのみである。

中期になると加曾利E式期に最も遺跡数が増加し、深谷市(旧・川本町)の上本田遺跡では大規模な環状集落も確認されている。本市では西原遺跡にて加曾利E式期後半の住居跡52軒を検出し、大規模な集落が形成されていたことが確認されている。この他、権現坂遺跡・富士山遺跡・寺内遺跡・上前原遺跡などで加曾利E式期の住居跡が見られる。

後期に入ると遺跡数は減少し、妻沼低地へ移る傾向が見られる。堀之内式期の小規模集落が、姥ヶ沢遺跡・萩山遺跡、深谷市(旧・川本町)の四反歩遺跡・山ノ腰遺跡で確認されている。

また、屋外埋甕が宮下遺跡(2)・萩山遺跡、土壙が姥ヶ沢遺跡・富士山遺跡で確認されているが、いずれも遺跡は小規模である。

晩期になると、活動の痕跡をほとんど認めることができない。

弥生時代の遺跡は、前時代に引き続き江南台地下の自然堤防上に営まれる。台地上では姥ヶ沢遺跡と富士山遺跡が後期の集落として確認されている。深谷市においても該期の遺跡が散見されることから、集落

が比較的集中する傾向が窺える。

古墳時代の遺跡は集落跡・古墳群・生産遺跡など数多く確認されており、本格的に本地域が土地開発されるようになる。

集落跡としては、前期の住居が確認された、姥ヶ沢遺跡・富士山遺跡・行人塚遺跡(8)などがある。行人塚遺跡からは、小鍛冶関連遺物が出土し、県内でも早い段階での製鉄技術の導入が確認される重要な事例となっている。また、前期の集落に伴う方形周溝墓が確認された、行人塚遺跡・原谷遺跡(6)がある。宮下遺跡・天神遺跡では、中期の集落が確認されている。

本流域右岸の古墳群は、姥ヶ沢遺跡・上前原遺跡・静簡院遺跡(13)・天神山古墳群(19)などが確認されている。また生産遺跡として、台地崖線部の斜面や台地上の平坦地を利用した埴輪窯跡群が2箇所検出されている。姥ヶ沢遺跡からは、斜面に8基の埴輪窯が2段に重複して構築されていることが確認され、権現坂埴輪窯跡群は、姥ヶ沢遺跡の東側800mほどの所に位置し、小さな谷を挟んで東側と西側の斜面に埴輪窯が並んで造られている。平坦地には、工房跡と考えられる竪穴や、粘土の採掘坑も発見されている。これら2箇所の埴輪窯は、6世紀前半に操業が始まり、6世紀代後半まで続き、周辺古墳へ埴輪を供給していた。特に権現坂埴輪窯跡群では高さ70cmを越す大形の円筒埴輪が作られており、埼玉古墳群への供給も行われていた可能性が考えられている。

奈良・平安時代の遺跡は、多くの遺跡から集落跡が本流域右岸より確認されている。宮下遺跡からは、付近に鍛冶炉が存在していたことが推定される。また、天神谷遺跡からは須恵器の窯が1基検出されている。本流域左岸の遺跡は、新田裏遺跡で、8世紀から10世紀におよぶ集落跡が調査されている。深谷市(旧・川本町)では、畠山遺跡・川端遺跡で集落跡が確認されている。

この時代の重要遺跡として奈良～平安期の古代寺院跡である寺内遺跡が挙げられる。寺院の周囲を外界と区切る大溝が、北辺で570m、東辺で170m、西辺で200m程確認されており、伽藍内には基壇をもつ建物跡が4基確認され、伽藍の東側には50軒以上の集落があり、南側には参道と推定される道路跡も確認している。寺院の活動時期は、8世紀前半から10世紀半ばの時期で、最盛期は9世紀後半と捉えられている。また、この寺内遺跡に隣接する深谷市(旧・川本町)の百済木遺跡では、8世紀初頭に位置づけられる豪族居宅跡と考えられる遺構が検出されている。両遺跡とも古代男衾郡の成立を推定する上で重要な位置を占めている。

中世になると、本流域右岸の遺跡は、宗教・信仰にかかわる遺跡や、武蔵七党やその他在地武士団の館跡が見られるようになる。

宗教・信仰にかかわる遺跡として、富士山遺跡・天神谷塚群・萩山遺跡・元八幡遺跡・金胎寺跡・神力寺跡・能満寺跡・鹿嶋遺跡・天神遺跡、深谷市(旧・川本町)では、万願寺跡が確認されている。天神谷塚群では、十三塚の一部と考えられる4基の塚群が確認されており、13世紀の常滑の甕片が採取されている。また鹿嶋遺跡では、土壇墓が確認されており、人骨の一部、銅環、数珠、銭貨が出土している。万願寺遺跡では、2重の堀に囲まれた墓域・地下式壇・竪穴住居跡・土壇群などが確認されている。

館跡として深谷上杉氏との関係が伝承されている上杉館跡、成沢館跡、谷縁館跡(中島遺跡内)が確認されている。上杉館跡は、東西250m、南北200mの範囲内に土塁・堀跡が確認されている。一部発掘調査が行われており、礎石をとまなう館跡・井戸跡が検出され、渡来銭・陶磁器片が出土している。また、



第2図 周辺遺跡分布図

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	合羽山遺跡	縄文、中世	21	下原遺跡	縄文、古墳、奈良・平安、中世、近世
2	宮下遺跡	縄文、古墳、奈良・平安	22	八軒遺跡	縄文、奈良・平安、中世
3	東原遺跡	縄文	23	鹿嶋遺跡	縄文、弥生、奈良・平安、中世、近世
4	萩山遺跡	旧石器、縄文、中世	24	下新田遺跡	奈良・平安
5	久保遺跡	近世	25	荒神脇遺跡	古墳、奈良・平安
6	原谷遺跡	古墳前	26	熊野遺跡	古墳、奈良・平安、中世
7	上前原遺跡	縄文、古墳	27	元境内遺跡	縄文、古墳、奈良・平安、中世、近世
8	行人塚遺跡	古墳前	28	諏訪脇遺跡	縄文、古墳、奈良・平安、中世、近世
9	代遺跡	縄文、中世	29	宮脇遺跡	縄文、古墳、奈良・平安、中世、近世
10	宮前遺跡	奈良・平安、近世	30	野原古墳群	古墳後
11	宿遺跡	奈良・平安、中世、近世	31	本田東台遺跡	縄文、古墳、奈良・平安、近世
12	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世	32	宮脇遺跡	古墳、奈良・平安
13	静簡院遺跡	縄文、奈良・平安、中世	33	田村陣屋跡	古墳、近世
14	中屋敷遺跡	古墳・奈良・平安、中世、近世	34	下原遺跡	縄文、古墳
15	上原遺跡	縄文、古墳、奈良・平安	35	上原遺跡	古墳
16	向原遺跡	旧石器、縄文、古墳	36	田中遺跡	古墳、奈良・平安
17	中原遺跡	古墳、奈良・平安	37	諏訪木遺跡	古墳、奈良・平安
18	松原遺跡	縄文	38	内神遺跡	古墳
19	天神山遺跡	縄文、古墳	39	船川遺跡	縄文、古墳
20	万吉下原古墳群	古墳前・後			

第1表 周辺遺跡一覧表

深谷市（旧・川本町）では、畠山館跡・本田館跡が確認されている。畠山館跡は、5次に渡る調査が行われており、石組墓からなる墓域や、館を画する薬研堀、大形五輪塔・石組井戸などが確認され、鎌倉時代から室町時代にかけての代表的な平地式の中世館と認識されている。本田館跡は、畠山重忠の主従と伝えられる本田二郎親常に由来されると伝えられ、東西125m、南北150mの長方形を呈する、堀と2重の土塁で構成された方形館と推定されている。

この他、中世の竪穴住居跡と推定される遺構が、谷縁館跡内で確認されており、寄居町では、赤浜天神沢遺跡で、鎌倉街道上道と推定される道路遺構が確認されている。

本流域左岸の遺跡は、中世墳墓が新田裏遺跡・宿遺跡(11)、鹿島遺跡・舟山遺跡で確認されている。新田裏遺跡は、火葬骨が埋葬され、これに板碑が伴う墳墓であり、宿遺跡では、集石墓が12基発掘調査されている。舟山遺跡は、多数の偏平河原礫とともに古瀬戸梅瓶の蔵骨器および板碑が出土しており、鹿島遺跡からは、東西16m、南北13m、高さ1.3mの塚の頂部から、配石をともなう板碑群が発見されている。台石が整然と並べられ、台石下にともなう土壇からは、火葬骨が出土している。

館跡としては、現在その形跡が確認できない堀ノ内館跡、北側に堀と土塁が残る三本館跡、東と北側に堀と土塁が残る平山館跡が確認されている。

近世の遺跡として本流域右岸では、権現坂塚群、行人塚塚群、山神塚などが確認されている。権現坂塚群は、1964年の分布調査で、東西120m、南北50mの範囲に12基ほどの分布が確認されていたもので、1989年に2基の塚が調査されている。山神塚は、山神祭祀にかかわるもので、山神遺跡内に1基確認されている。また、この山神遺跡内では、江戸期の家屋跡と推定される区画溝と井戸跡が検出されており、常滑の陶器片が採取されている。

本流域左岸の江戸時代の遺跡は、新屋敷遺跡のみが確認されており、発掘調査は行われていないが、陶磁器類が採取されている。

Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の概要

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、合羽山遺跡隣接地を含む開発区域全体を網羅できる様に、北西隅をA-1として南へ1・2…、東へA・B…とし、Aラインは北から南へA-1・A-2…と呼称した。Bライン以東もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

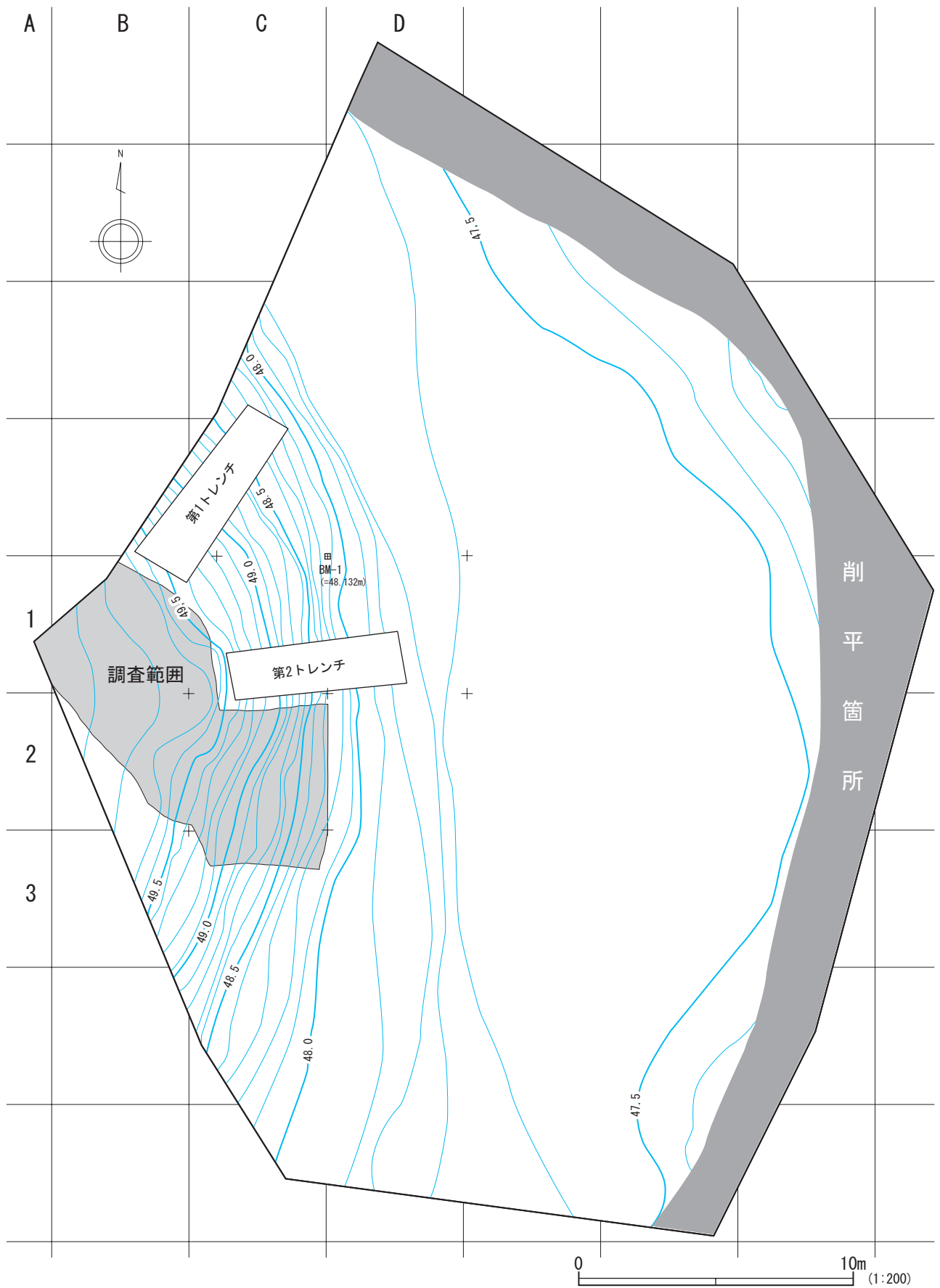
発掘調査は、地表面で遺物が確認されたため、直ちに上記グリッドの設定を行った。なお、座標は世界測地系に基づく基準点測量による。グリッド設定後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後、慎重に取り上げを行った。遺構も遺物同様必要に応じて写真撮影した後、実測を行った。そして最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

2 検出された遺構と遺物

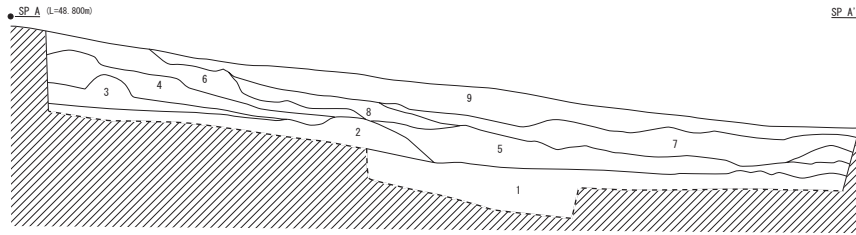
本調査によって検出された遺構・遺物は限られたエリアから検出している。遺構は、墓壇1基、土坑2基であった。遺物は、板碑・台石・石製蓋・小刀・土師質羽釜・陶器壺・磁器片・土師器片・砥石・縄文土器片・石鏃等が出土し、コンテナ9箱分の出土量であった。鎌倉時代を中心とした中世の遺物が出土している。遺構については調査区全面にわたり攪乱を受けており、わずかに墓壇1基のみ埋葬状況が分かる状況であった。



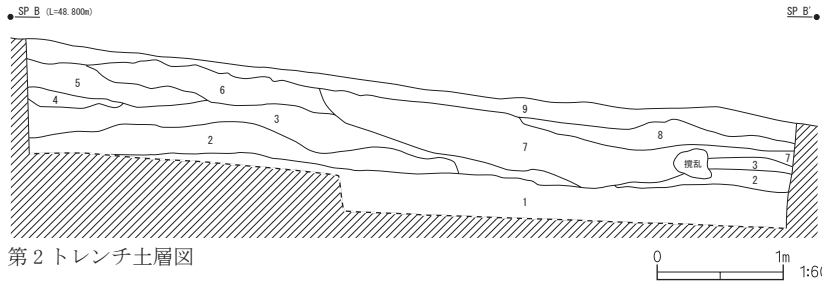
第3図 調査地点位置図



第4図 調査区周辺地形図



第1トレンチ土層図



第2トレンチ土層図

第1・2トレンチ土層説明 (AA', BB')

- 1 灰黄褐色土：地山 しまり強 粘性有
シルト層への漸移層。
 - 2 黄褐色土：地山 しまり強 粘性有
ハードローム層。
 - 3 黄褐色土：地山 しまり有 粘性有
ソフトローム層。
 - 4 暗褐色土：しまり無 粘性無 サラサラ。
*ローム粒やや含む。
 - 5 褐色土：しまり有 粘性弱 *ローム
ブロック、ローム粒子多く含む。
 - 6 褐色土：しまり有 粘性弱 *ローム
粒含む。
 - 7 褐色土：しまり有 粘性弱 *ローム
ブロック、ローム粒子含む。
 - 8 褐色土：しまり有 粘性弱 *ローム
ブロック、ローム粒子多く含む。5と同じ。
 - 9 褐色土：しまり強 粘性弱 *ローム
ブロック、ローム粒子含む。
- * 4～9層は後世の整地により表土が剥がされ埋土が形成されている。

第5図 第1・2トレンチ土層図

IV 遺構と遺物

1 周辺の地形について

今回の開発区域を示したのが第4図である。コンターラインが指し示すように、段丘が東から西へ立ち上がる。東～東南側が接道しており、隣接部分は著しく削平されていたため、等高線は示していない。

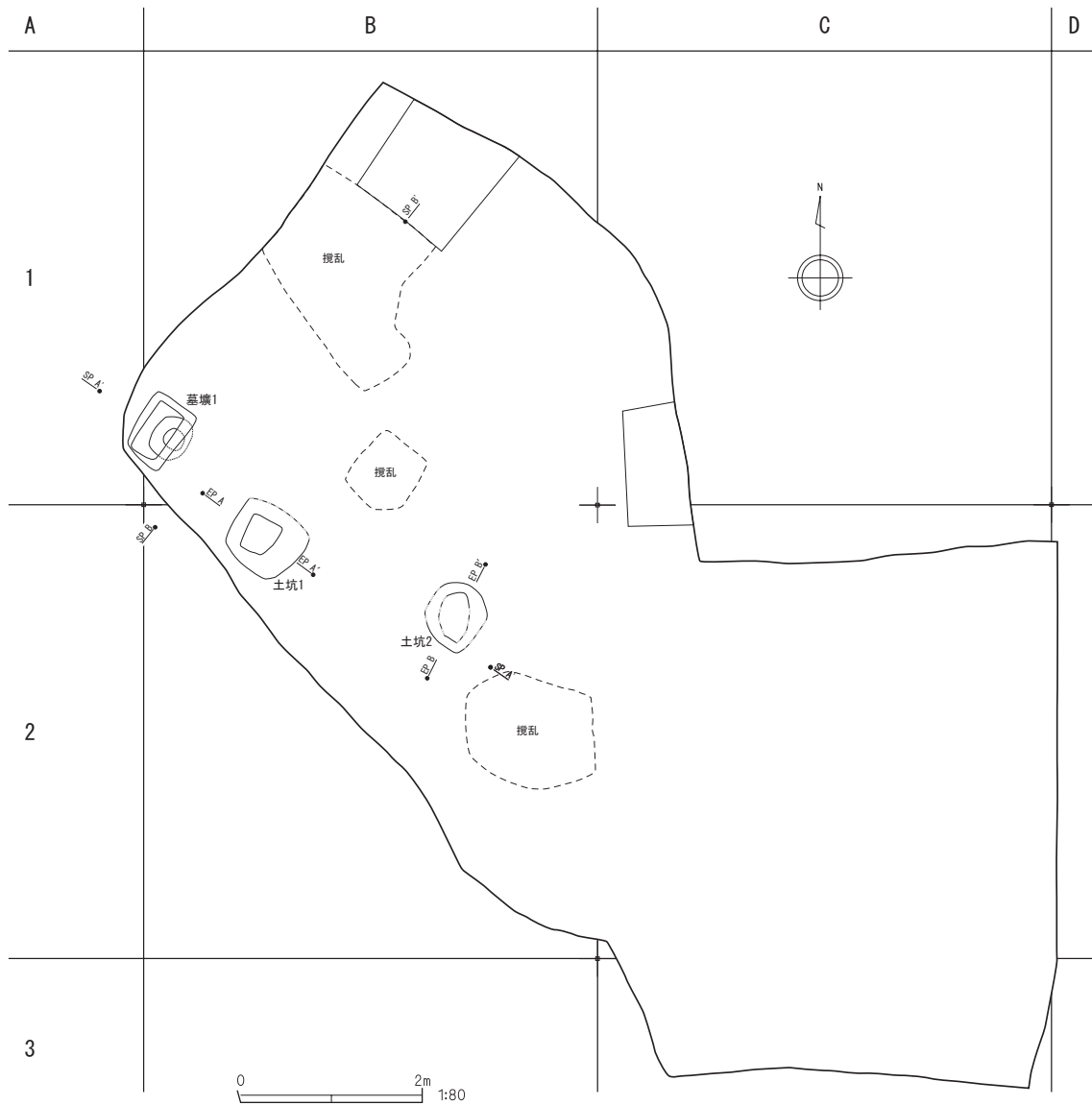
試掘トレンチを利用して、周辺地形の断面を確認したところ（第5図）、表層が広範囲にわたり攪乱されており、古墳や人為的な塚等とみられる盛土層は確認できなかった。

2 遺構

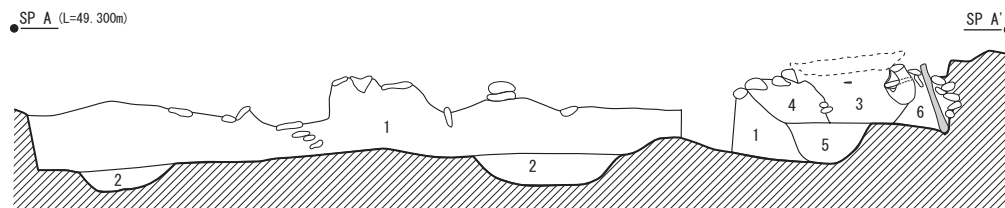
調査区は集石が散乱している状態であり（第8図）、その多くが原位置を留めていなかった。調査区から遺構として確認できたのは、墓壇1基、土坑2基である。土坑については上層の攪乱が著しく、土坑の掘り込みレベルが不明確であり、ローム面で掘方が確認された。集石墓1基に用いるには多すぎる平石、蔵骨器と考えられる土器・陶器の散布状況と併せて考慮すると、土坑2基も集石墓の可能性が考えられる。なお、墓壇以外に粉末・小破片の人骨が3地点にわたって確認できた（第9図）。これは、蔵骨器の個体数を示すものとして捉えている。なお、火葬遺構は確認していない。

第1号墓壇（第10図）

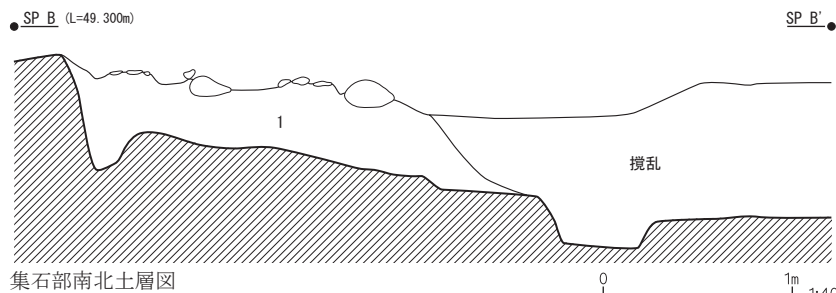
A-1グリッドからB-1グリッドより検出した。長軸0.60 m、短軸0.42 m、深さ0.27 mを測る。軸方向はN-37°-Eである。墓の形態は集石墓であるが、平石で区画された状態になっており、墓壇上面を厚手の緑泥片岩が蓋をする形で検出された。この片岩の下からは敷石が確認されておらず、墓壇の蓋である可能性が考えられる。墓床については、掘り込みが浅くローム面まで達していない。覆土とは色調による差異が見られないことから、掘削して蔵骨器を設置後、すぐに埋葬したと思われる。た



第6図 調査区全測図



集石部東西土層図



集石部南北土層図

集石部ベルト土層説明 (AA'、BB')

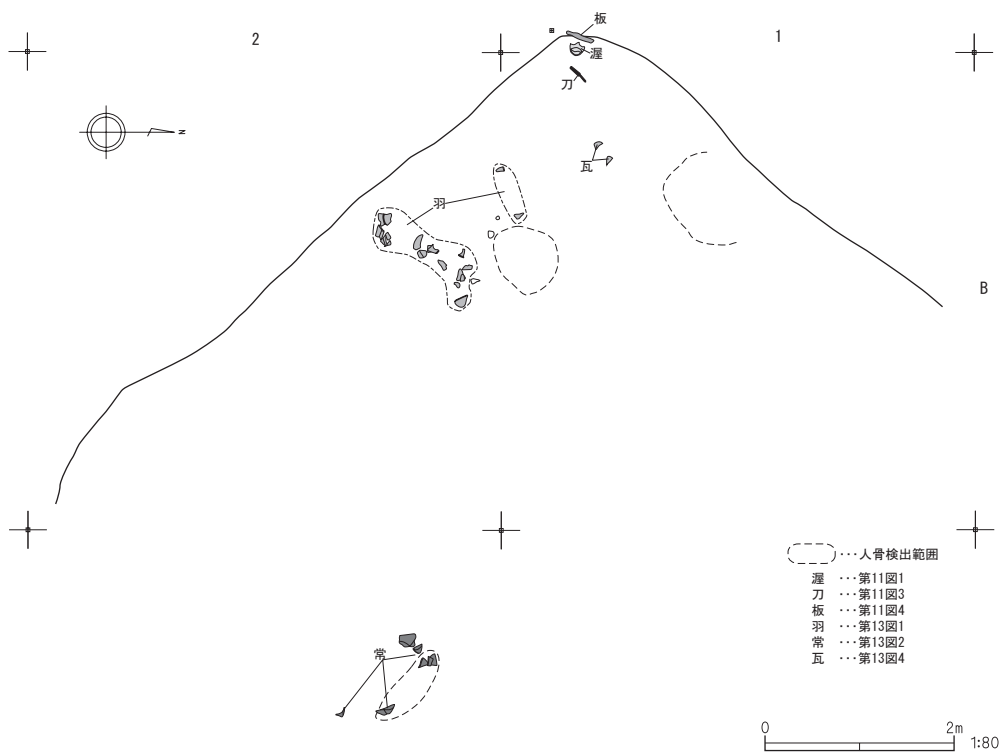
- 1 暗褐色土：しまり弱 粘性無 所々攪乱されている。
- 2 黒褐色土：しまり弱 粘性無 ローム粒子含む。
- 3 暗褐色土：しまり弱 粘性弱 極微量の炭化物。
- 4 暗褐色土：しまり弱 粘性無 極微量の炭化物。
- 5 極暗褐色土：しまり有 粘性弱 炭化物含む層位上面に硬化面。
- 6 暗褐色土：しまり弱 粘性弱 極微量の炭化物ロームブロック含む。

※土層1は攪乱との見分けが困難であり、分層不可能であった。

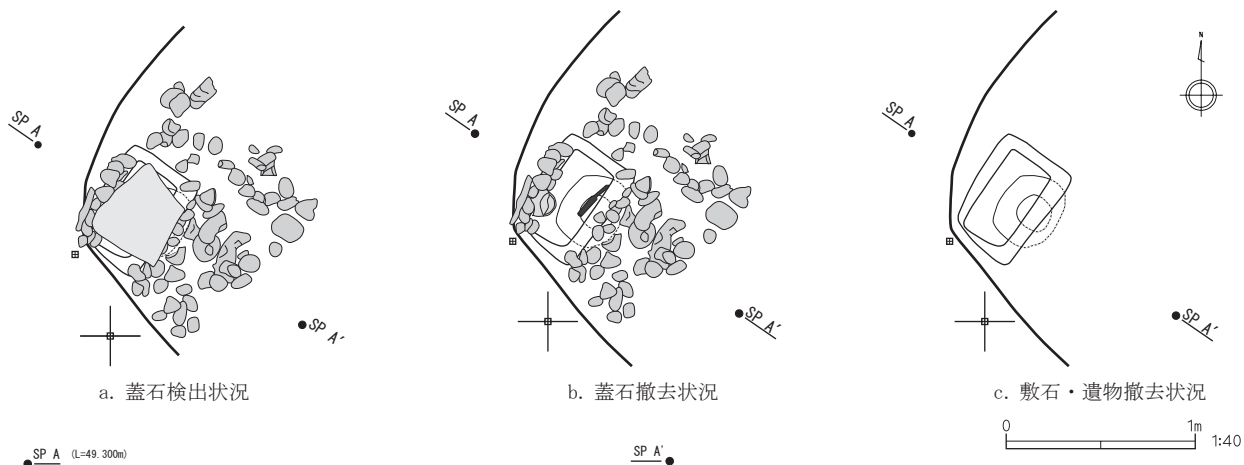
第7図 集石部土層図



第8図 集石検出状況

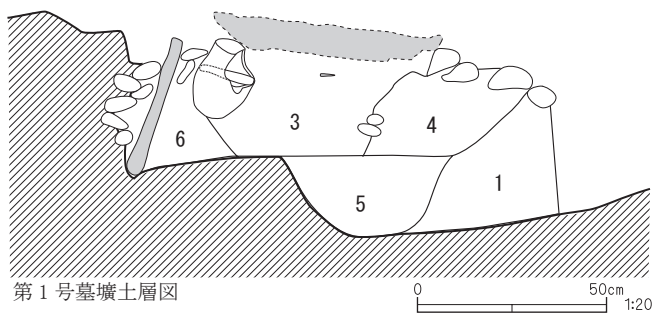


第9図 蔵骨器出土状況



SP A (L=49.300m)

SP A'



第1号墓墳土層図

墓墳土層説明 (AA')

- 1 暗褐色土：しまり弱 粘性無 所々攪乱されている。
 - 3 暗褐色土：しまり弱 粘性弱 極微量の炭化物。
 - 4 暗褐色土：しまり弱 粘性無 極微量の炭化物。
 - 5 極暗褐色土：しまり有 粘性弱 炭化物含む層位上面に硬化面。
 - 6 暗褐色土：しまり弱 粘性弱 極微量の炭化物 ロームブロック含む。
- ※土層1は攪乱との見分けが困難であり、分層不可能であった。

第10図 第1号墓墳


だし、掘方については、ローム面に不自然な落ち込みがあるため、再葬または改葬している可能性もある。板碑の基部が南西方向に差込まれており、墓墳区画の軸方向と概ね一致する。板碑基部裏面には礫による裏込めがなされ、安定化が図られている。覆土の切合いからは、板碑の造立が先の可能性がある。

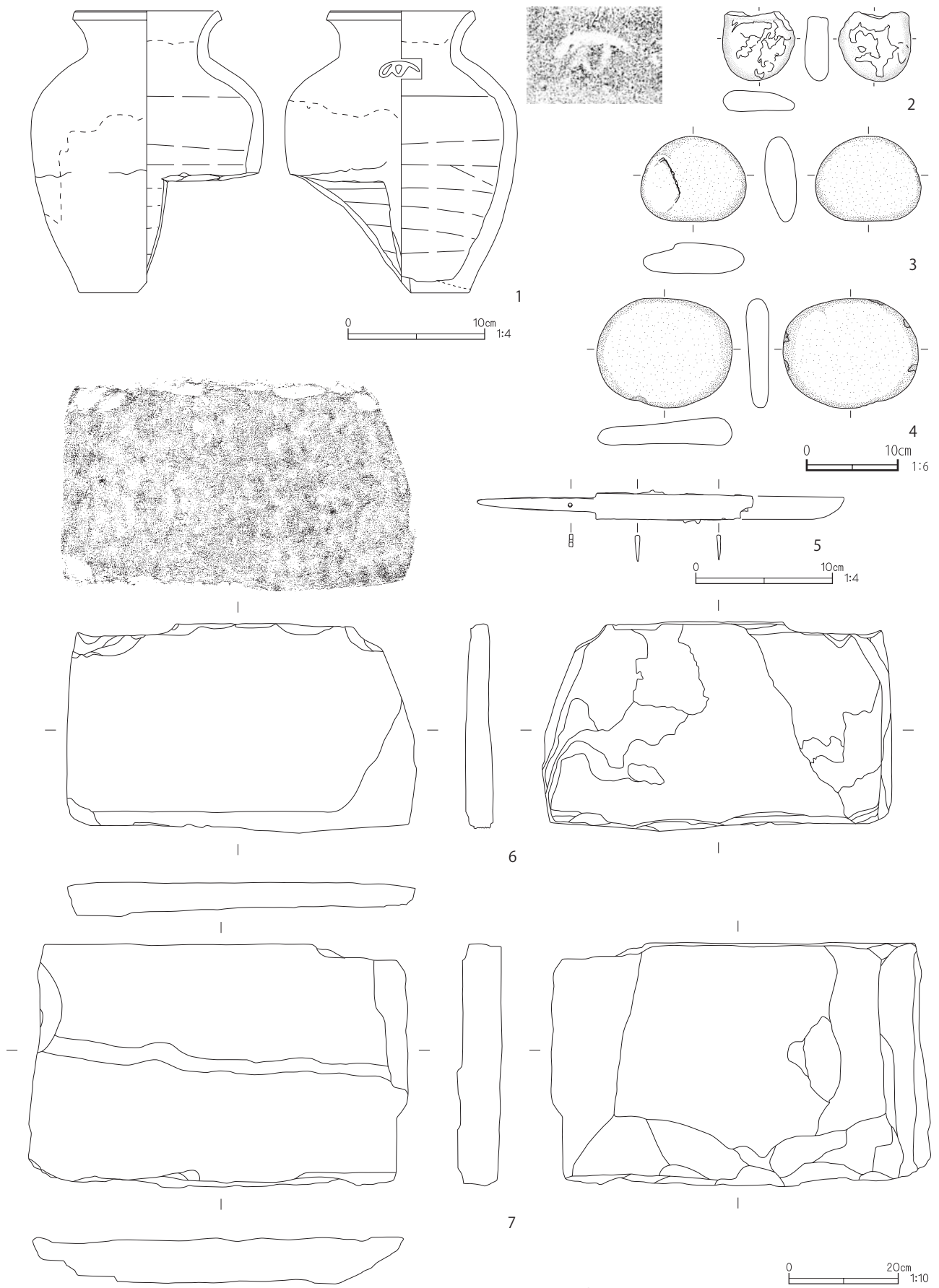
出土遺物 (第11図)

陶器壺1基、小刀1口、板碑1基を検出した。なお、埋葬箇所を塞いだと思われる緑泥片岩製蓋石と、炭化物状の融着物がみられた蔵骨器内蓋も併せて図示した。法量等は観察表を参照されたい。

1は陶器壺、渥美産である。均整のとれた形状であるが、体部下半の整形はやや雑である。口頸部へ肩部にかけ施釉されている。体部上半には、釉薬のため判然としないが押印または陰刻があり、第13図に示した。内面には粘土紐の痕跡が見られる。検出場所は墓墳の西壁面に添っており、天地逆さで出土した。体部下半を半截されているが、その整然とした割口は意図的な加工と考えられる。納骨されており、蔵骨器として使用されていた。割口に蓋石(4)と頸部内面に蓋石(2)を置く。なお、口縁部も一部打ち欠いている。口縁下には台石(3)を据え置く。

第2表 第1号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	陶器 壺	10.4	20.6	(9.9)	AG	暗灰褐色	A	70%	渥美焼 押印「  」
2	内蓋使用礫	最大長 7.1 cm、最大幅 7.9 cm 最大厚 2.5 cm 重量 195 g 砂岩製、炭化物状付着、一部研磨							
3	台石	最大長 9.2 cm、最大幅 11.5 cm 最大厚 3.3 cm 重量 470 g 砂岩製							
4	蓋使用礫	最大長 11.9 cm、最大幅 14.8 cm 最大厚 3.0 cm 重量 825 g 砂岩製							
5	小刀	刀身残存 11.2 cm 茎 8.8 cm 平造 丸棟							
番号	種別	軸長	幅	厚	残存率	備考			
6	板碑	37.0	64.0	6.0	基部				
7	蓋石	44.0	72.0	8.0	完形	砂岩製			



第11图 第1号墓出土遗物

2は蔵骨器内蓋である。頸部内面より検出した。目の粗い砂岩であり、明瞭な痕跡ではないが研磨して成形していると思われる。内外面に炭化状の融着物が見られた。

3は蔵骨器台石である。硬質な砂岩であり、表面やや中央に加工痕らしき窪みが見られる。蔵骨器の座りを良くするためのものか。

4は蔵骨器蓋石である。加工はみられない。砂岩である。

5は小刀である。墓壇の中央、緑泥片岩の下から、軸方向を向いた状態で検出された。鏑の無い平造であり、丸棟である。刀身は6寸を想定して図化してある。茎は3寸であり、目釘穴は1つ（径0.9 cm）である。銘文は無い。

6は板碑の基部である。64.0 cmを測る横幅から、大型の板碑と推定される。板厚は6.0 cmを測るが、横幅と比べやや薄い印象を受ける。

7は墓壇の蓋と思われる緑泥片岩である。平らな面を上に向けて検出した。断面は台形を呈するが、意図的に形状を作り出しているかは不明である。

前述の遺物の他、人骨を約450 g 蔵骨器の中より検出している。いずれも小破片である。人為的な破砕か、焼成時の破砕かは判然としない。炭化物は見受けられなかった。また、人歯は検出できなかった。

小結

蔵骨器の渥美壺は12世紀末頃の所産と考えられるが、埋葬に使用したのは副葬品の特徵から13世紀前半以降と推定され、渥美壺は二次転用の蔵骨器と考えられる。埋葬状態については「V調査のまとめ」で後述する。

第1号土坑（第12図）

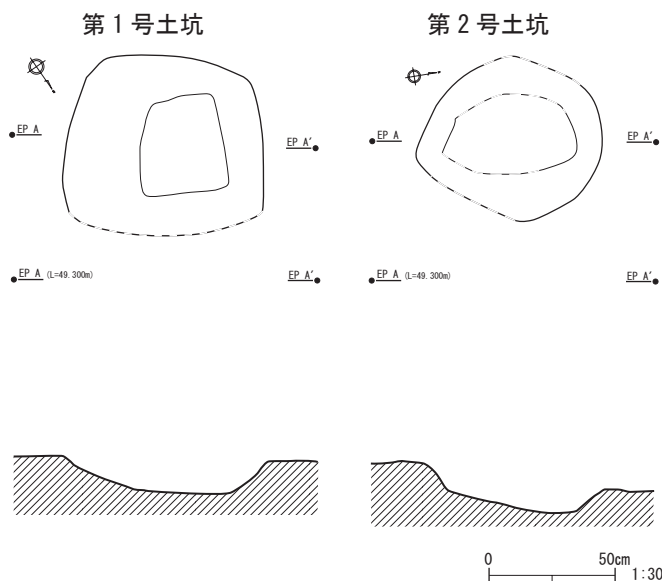
B-1グリッドからB-2グリッドより検出した。長軸0.78 m、短軸0.72 m、確認面からの深さ0.13 mを測る。やや東西が長い方形プランを呈し、軸方向はN-128°-Wである。ローム面まで掘削して検出された。なお、遺物は確認されていない。散石の状況から、集石墓の可能性はある。

第2号土坑（第12図）

B-2グリッドより検出した。長軸0.69 m、短軸0.60 m、確認面からの深さ0.13 mを測る。不整形な円形プランであるが、方形プランの可能性も残る。軸方向はN-22°-Wと思われる。ローム面まで掘削して検出された。なお、遺物は確認されていない。散石の状況から、集石墓の可能性はある。

3 遺構外出土遺物

遺構外より出土した遺物は、中世を主体とし土師質土器羽釜1点、常滑産壺1点、瓦質土器1点、陶磁器片、板碑6基、台石2点、石製蓋1点、及び加工痕のある用途不明石材7点、古代の遺物で土師器2点、



第12図 第1・2号土坑

縄文時代早期の縄文土器片、石鏃1点、礫器1点、時期不明の砥石1点を検出した。人骨の検出範囲から蔵骨器の判断をしているため、蔵骨器出土状況を第9図で示した。法量等は観察表を参照されたい。

中世遺物 土器・陶磁器・石製品 (第13図)

1は土師質羽釜である。B-2グリッドより検出した。抜根時に破碎されている。付近より骨粉が確認されていることから、蔵骨器として使用されたと推察される。この形状の羽釜は完形での類例が当地域では少ないことから、特に詳述する。

形状・特徴

全体的に器壁が厚く、焼成は良好である。胎土は小粒の混入物が多く混じり、良質な粘土とは言えない。色調は橙色を呈することから、低温で焼成されたとと思われる。器形は鉄製羽釜の模倣と思われ、その口縁部はやや内傾し、3点の穿孔(径0.9cm)がある。中心に1対、中心から右に約4cmずれる形で1点の構成である。口唇部は平坦であり、僅かにスサ状の痕跡が見られる。鏝はナデ付けられており、上下に若干の歪みが見られるが、下方へ垂れる印象がある。下面の先端から斜めに整形されており、刃先を上にしたカッターの刃のような形状であるが、先端は丸みを帯びている。鏝と体部の接合部は、上面に厚めに接合面が残る箇所が見られるのに対して、下面は小指指頭幅に挟りが回っている。体部から底部にかけては、やや底面が潰れた丸底になり、ぼつてりとした印象を受ける。底部外面は剥落があるが、スサ状の圧痕が僅かに見られる。底～体部外面及び鏝下面には煤が付着している。

調整痕

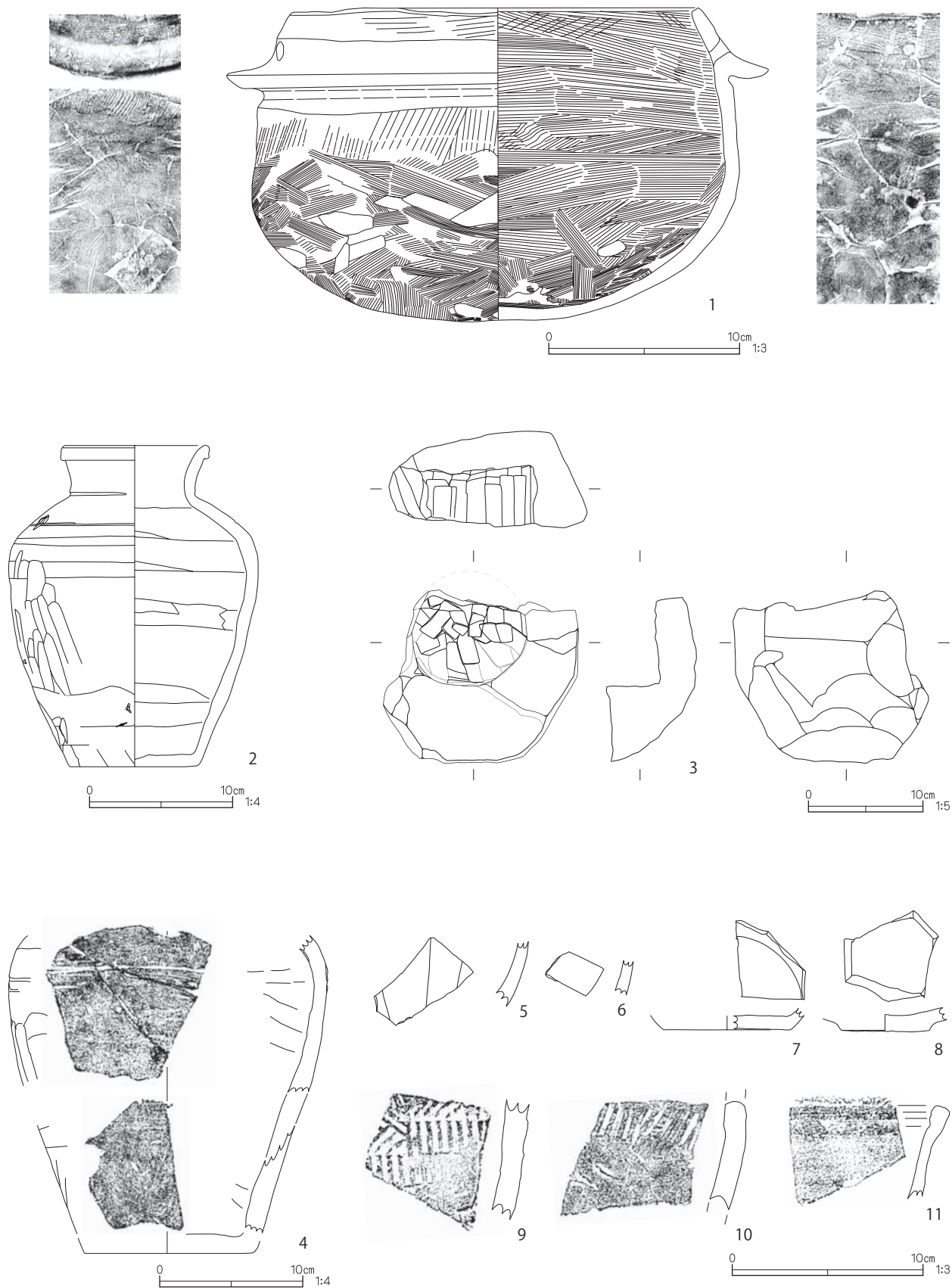
全体的に調整は粗めであるが、2種類のハケメが明瞭に残る。以下部分ごとに列記し、第V章に観察結果から得られた製作・調整手順を述べる。

口唇部はナデが施され、その縁は内外面の調整の影響で軽く盛り上がる。口縁部は横位のナデの後、痕跡を指によってナデ消されている。鏝はハケにより調整後、痕跡をナデ消されている。

体部外面にはX状にハケメが残る。また部分的にタタキの痕跡も見られるが、口縁部にも薄くタタキの痕跡があることから、口縁部～体部上面にかけて整形した可能性が考えられる。内面は横位にハケメがめぐる。底部外面は、球形の整形のためか、縦横にハケメが施され、ハケで削り取ったような強い調整も見られる。内面は細かい単位のハケメが見られ、縦横に調整されている。

2は陶器壺、常滑産である。B-3グリッドで検出した。抜根時の攪乱により破碎されている。周辺より骨粉と伴に出土しているため、蔵骨器と考えられる。器面には製作時のものと思われる、細かな粘土塊が付着している。焼成具合は、表層は明灰褐色を呈しているが、器壁内面は明橙褐色であり、良好とは言えない。形状は均整がとれており、歪みは見られない。肩部に沈線がめぐる。口縁部は折り返されており、一部を打ち欠く。13世紀末頃の所産と考えられる。なお、3の石製蓋の窪みと口径がほぼ一致することからセット関係にあると思われる。

3は石製蓋であり、材質は凝灰岩質砂岩。B-3グリッドで検出した。平面形は緩やかな八角形を呈し、断面は台形状である。内側に円形の窪みがあり、径は推定11.0cmを測る。また、約1.5cm幅のノミ痕が見られた。前述の常滑壺(2)とセット関係にある可能性が考えられる。形状からは石櫃の蓋と考えられたが、櫃が検出されなかった。



第 13 図 遺構外出土遺物 (1) 中世土器・陶磁器・石製品

第3表 遺構外出土遺物観察表(1) 中世土器・陶磁器・石製品

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	羽釜	21.0	16.3	-	ABC	橙色	A	80%	羽部分最大径 28.4cm 羽部分に3箇所の穿孔がある
2	陶器 壺	9.9	22.4	9.1	ABMN	明灰褐色	B	95%	常滑焼
3	石製蓋	縦幅		横幅		高さ		30%	凝灰岩質砂岩製 内側円形の穴、径 11.0 cm ノミ痕 1.5 cm 単位
		(15.1)		(17.0)		7.9			
4	瓦質土器	-	-	(11.8)	ADGIN	灰黄褐色	B	体部片	在地産 肩部に条痕が3条あり 蔵骨器か?
5	青磁 碗	-	-	-	AB	オリーブ灰色	A	体部片	龍泉窯鎚文碗あるいは鎚蓮弁文 13C 初～前半
6	白磁 小皿?	-	-	-	AB	明オリーブ灰色	B	体部片	
7	白磁 碗	-	-	(6.6)	AB	明オリーブ灰色	A	底部片	
8	かわらけ	-	-	(5.6)	BDN	淡黄色	C	底部片	ロクロ整形 回転糸切
9	陶器	-	-	-	ABMN	褐灰色	A	体部片	タタキ目有
10	陶器	-	-	-	ABMN	褐灰色	A	体部片	タタキ目有
11	灰釉陶器 鉢	-	-	-	ABN	浅黄色	A	口縁部片	口唇部に釉葉

4は瓦質土器壺である。C-2グリッドで検出した。体部～底部の破片であるが、付近より骨粉が確認されているため、蔵骨器と思われる。陶器を真似たものか、肩部に3条の条痕が施されている。焼成はやや不良で、内・外面は褐灰色であるが器壁内部は橙色を呈する。在地産であり、13世紀中葉～14世紀中葉に見られる遺物である。

5は青磁であり、文様からは龍泉窯鎚文碗、あるいは鎚蓮弁文碗と見られる。6は白磁碗の体部破片、7は白磁皿の底部破片である。磁器類はいずれも13C初～前半の所産と考えられる。8はロクロ成形された、かわらけの底部破片である。9・10は陶器甕の胴部破片であり、表面にタタキ目が見られる。11は山茶碗系捏ね鉢の口縁部破片。口唇部に釉がかかり、体部外面に指頭状の圧痕が見られる。13C後～14C初頭の所産と考えられる。蔵骨器の蓋としての使用が疑われる。

板碑 (第14・15図)

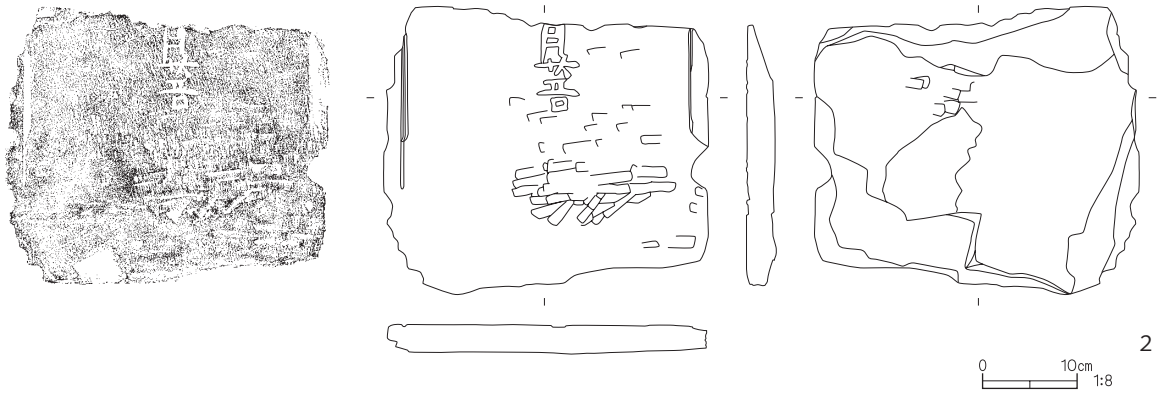
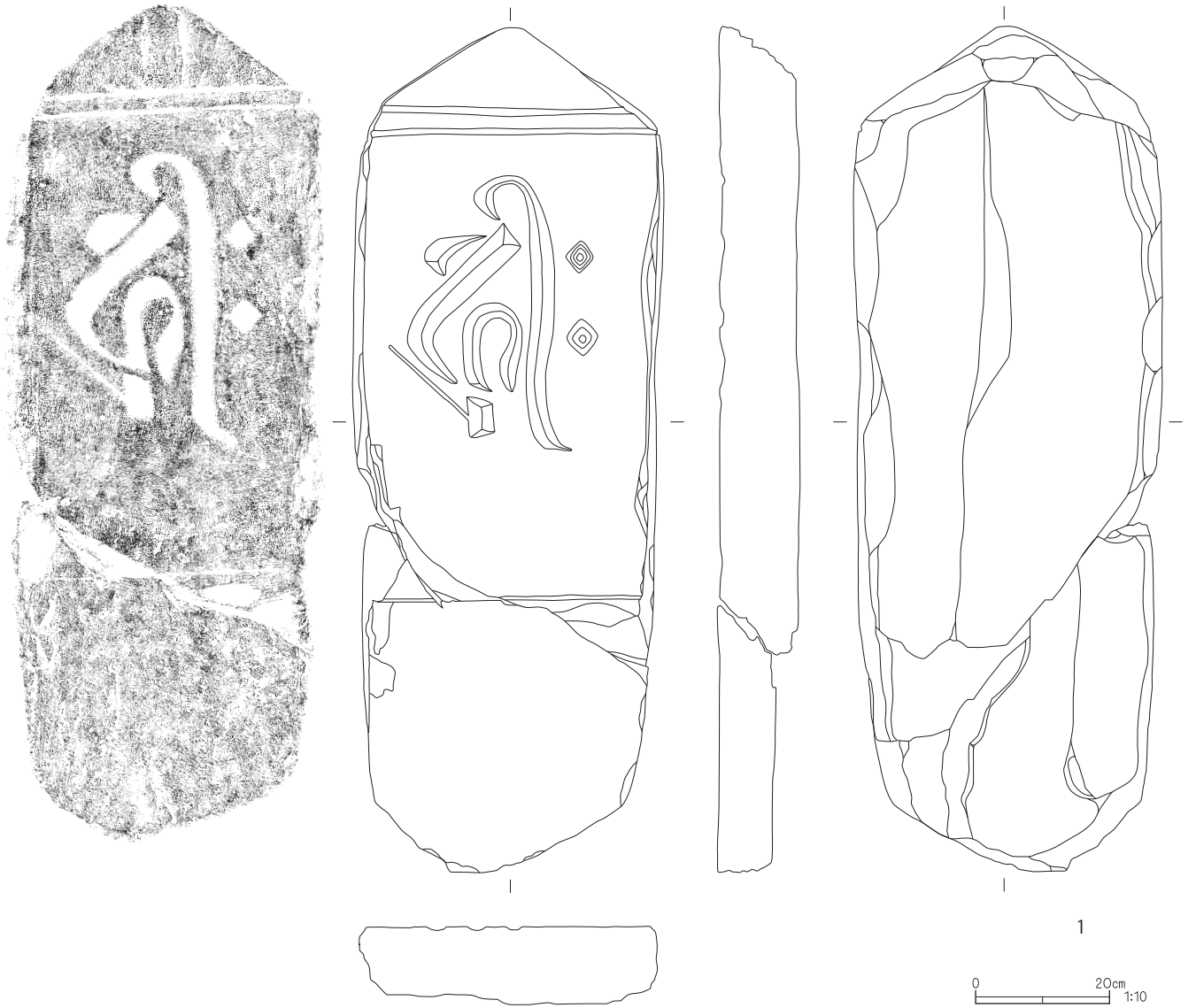
1は試掘調査の際に地表面に露出しており、B-2グリッドより検出した。主尊の阿弥陀種子は正体であり、浅い葉研彫りで表現されている。種子からは、イ点が連続している、カ点の最終画が連続している、カ点とラ点が区分されている、ラ点の返りが中途より始まる等の特徴が見られる。銘文は見られない。二条線は線彫りで表され、羽刻みは見られない。下部にのみ杵線が彫られている。種子の形態や厚肉で大型であることから、初発期の板碑としての特徴を備えている。

2は試掘調査の際に地表面に露出しており、B-2グリッドより検出した。下部～基部にかけての破片であり、主尊は欠損している。線彫りした銘文「廿五日」が確認された。字体に特徴があり、「廿」を「卅」と刻む例や、「五」の一画目がない例などが静簡院に所在する板碑等に見られることから、在地の石工が彫ったものと推測される。表裏に幅1.0cm単位のノミ痕があり、表面は研磨されている。両側面には杵線が刻まれているが、下部には見られない。

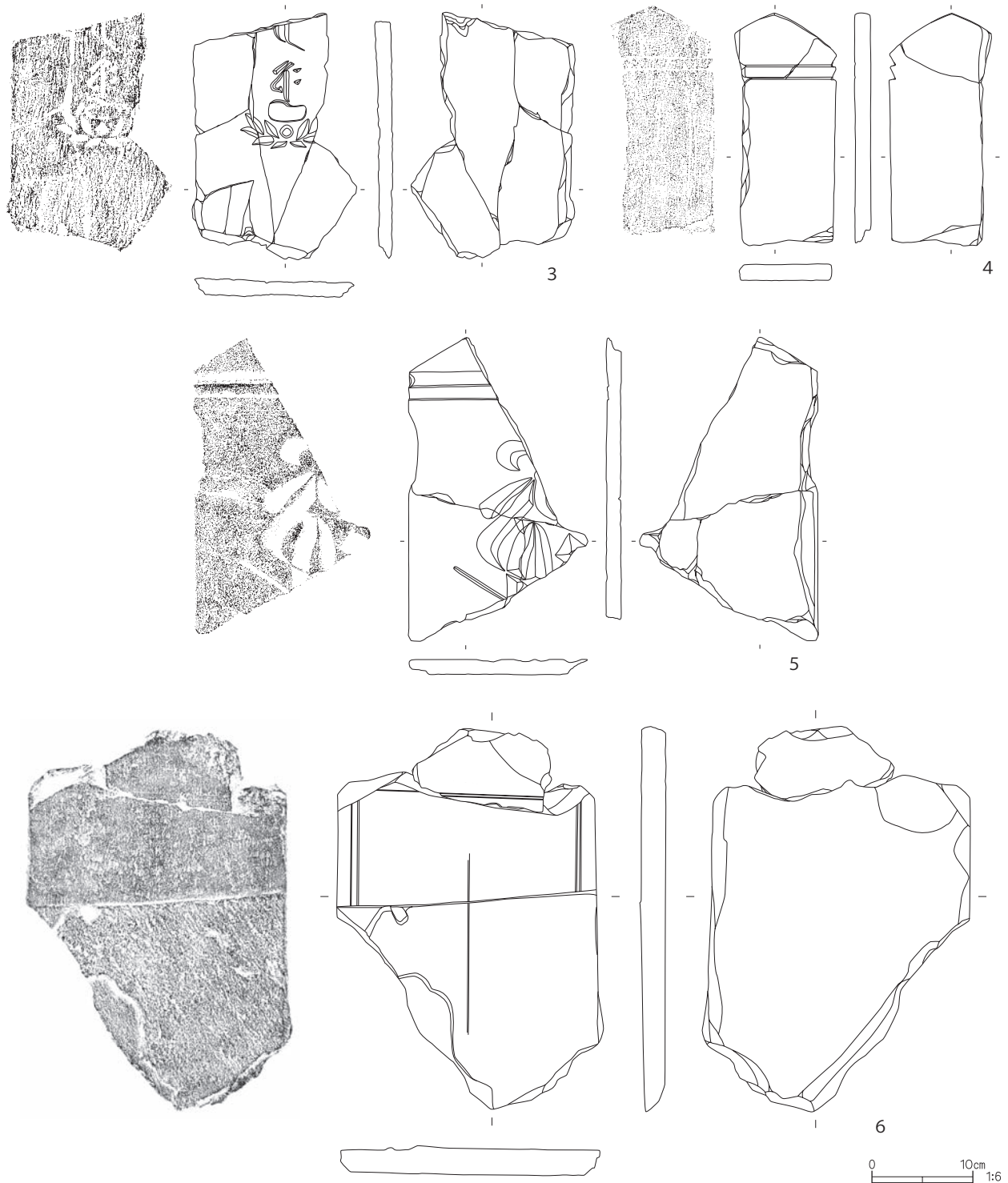
3はB-2グリッドから検出した。碑面は上部に欠損した種子が確認され、バクまたはアクが刻まれる。また蓮座が葉研の陰刻で表現され、蓮実も見られる。構成からは真言が刻まれたものと思われる。

4は試掘調査の際に地表面にて検出した。横幅の復元値は約12.2cmと推定される。整形されているが、主尊、銘文等の表現は刻まれていない。二条線は線彫りで表現され、羽刻みは側面にのみ成形されている。全ての面が丁寧に研磨されており、羽刻みに至るまで同様である。主尊が見られないが、遺跡の性格からは供養塔として使用を考えられるため、墨書または朱書されていた可能性も疑われる。

5はB-2グリッドから検出した。横幅の復元値は約30.0cmと推定される。主尊は異体種子の阿弥



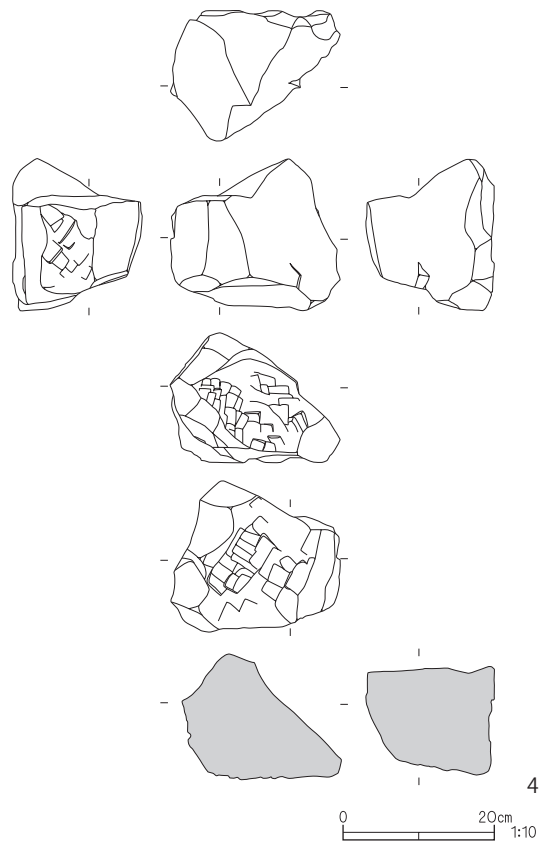
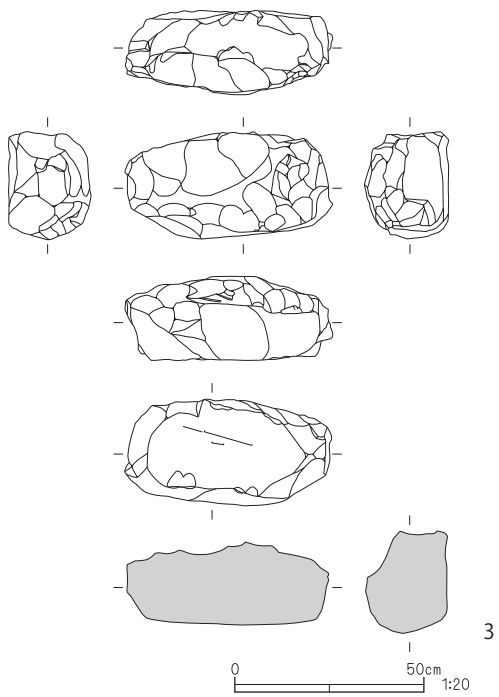
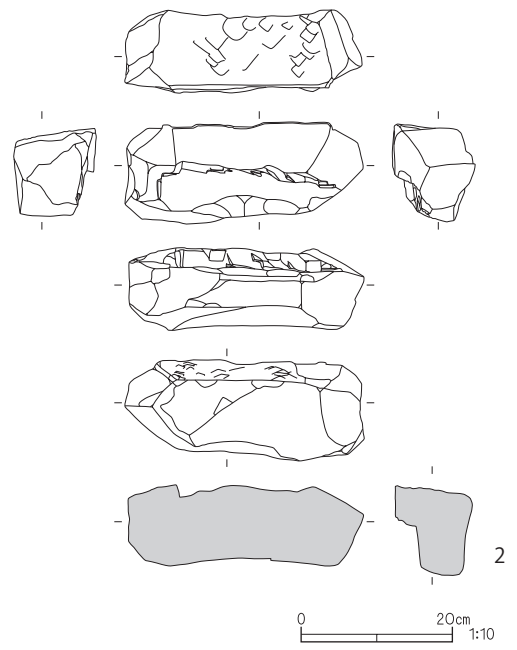
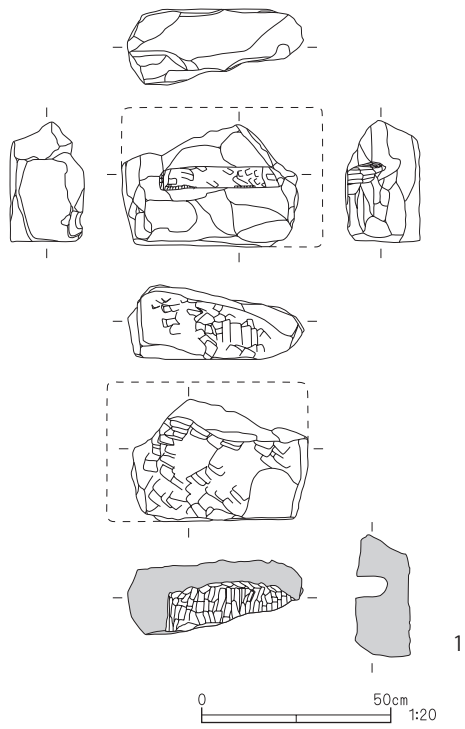
第14図 遺構外出土遺物(2) 板碑1



第15図 遺構外出土遺物(3) 板碑2

第4表 遺構外出土遺物観察表(2) 板碑

番号	型式	計測値			西暦	二条線	羽刻み	粹線	残存率	備考
		軸長	幅	厚						
1	阿弥陀1尊種子	125.5	45.0	11.0	不明	線影	なし	下部	完形	
2	不明	30.4	34.4	3.0	不明	—	—	両脇	下半~基部	「月二十五日」か?
3	不明	24.3	16.3	1.7	不明	—	—	両脇	下半部	真言か?
4	なし	22.7	10.0	1.6	不明	線影	側面	なし	上半部	主尊・銘文等の刻書なし
5	阿弥陀種子	30.0	17.7	1.5	不明	陰刻	あり	—	上半部	
6	不明	37.5	25.6	2.9	不明	—	—	なし	基部	中央・両脇・下部に割付線



第16図 遺構外出土遺物(4)石造物1



第17図 遺構外出土遺物(5) 石造物2

第5表 遺構外出土遺物観察表(3) 石造物

番号	種別	計測値 ※()は復元値			残存率	備考
		縦幅	横幅	高さ		
1	台石	32.0	46.5	19.5	60%	凝灰岩質砂岩製 柄穴 33.0×5.5×10.5 cm 3種のノミ痕 4.0 cm、2.5 cm、1.5 cm単位
2	台石	34.0	13.0	10.8	30%	凝灰岩 柄穴あり ノミ痕 1.5 cm単位
3	不明	53.5	28.5	22.0	?	凝灰岩質砂岩製
4	不明	22.4	20.2	17.0	?	凝灰岩質砂岩製 ノミ痕 1.5～2.0 cm単位
5	不明	25.0	21.8	17.6	?	凝灰岩質砂岩製
6	不明	18.6	30.0	11.2	?	凝灰岩質砂岩製
7	不明	23.4	21.6	12.7	?	凝灰岩質砂岩製 ノミ痕 1.5～2.0 cm単位
8	不明	22.2	12.6	12.4	?	凝灰岩質砂岩製
9	不明	14.8	13.8	12.0	?	凝灰岩質砂岩製

陀如来であるが、それ以外は欠損により不明。山形、側面は研磨して調整されている。

6はB-2グリッドから検出した。下部～基部にかけての破片である。主尊は欠損して不明。両脇及び下部にそれぞれ2条、中心に1条の割付線が僅かに確認される。なお、両脇及び下部条線は枠線の可能性もあるが、微弱な刻みであるため割付線として考えている。下部の割付線は中心線に対して直交していない。碑面及び側面は研磨されている。

石造物

いずれも、B-1グリッドからB-2グリッドにかけての集石より検出した。1は板碑の台石(支石)である。材質は凝灰岩質砂岩。形状は長方形であり、復元値は37.0 cm×53.0 cm×19.5 cmである。33.0 cm×5.5 cm×10.5 cmの柄穴を持つ。成形については、3種類のノミ痕が確認されている。視認できる範囲では、約4.0 cm幅のノミで底面、約2.5 cm幅のノミで下側面、約1.5 cm幅のノミで柄穴を成形している。柄穴に適合する基部の残る板碑は確認できなかった。

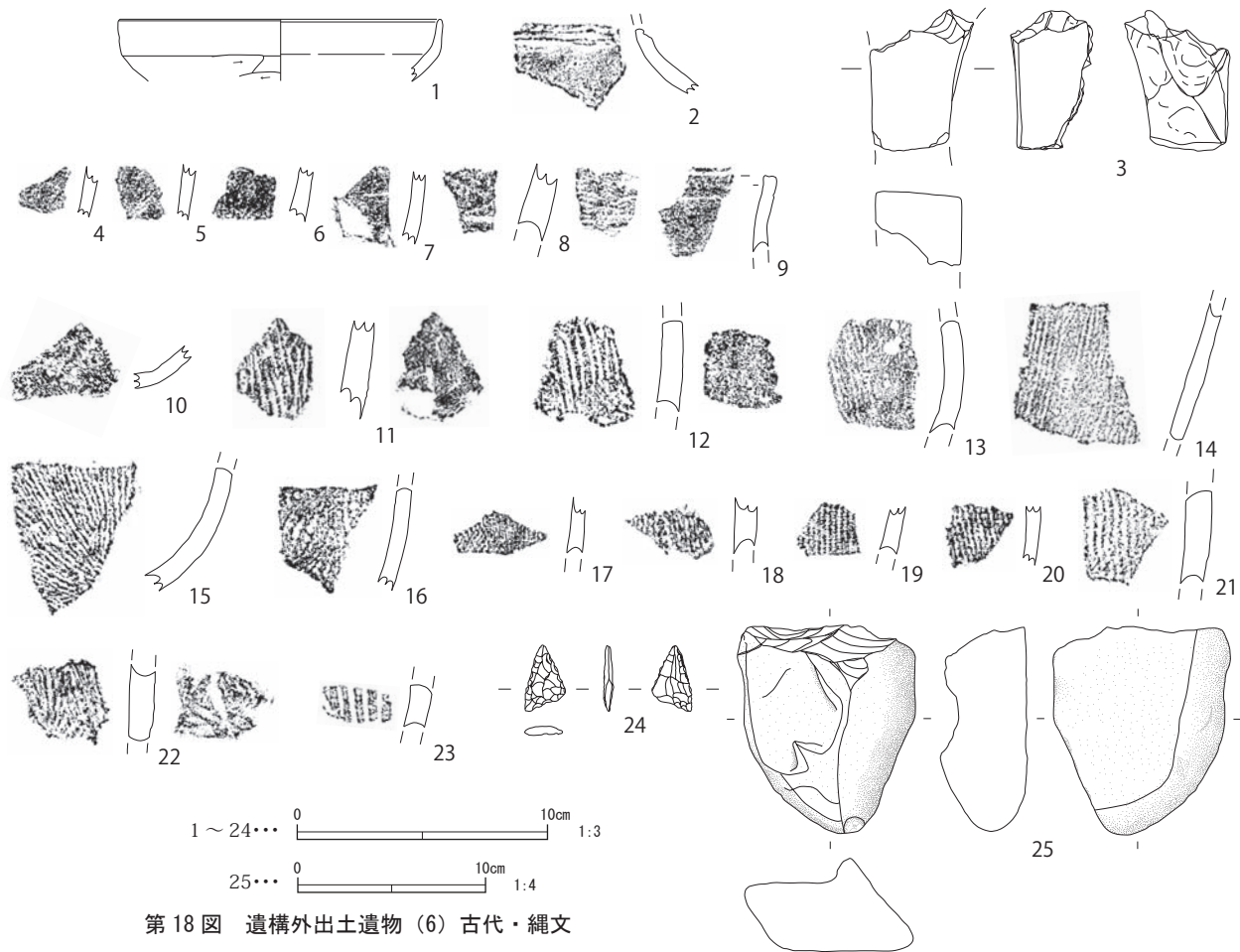
2は板碑の台石(支石)である。材質は凝灰岩である。形状は長方形と推察され、柄穴を確認している。成形については風化が著しく、辛うじて底面に約1.5 cm幅のノミ痕を見て取れる。

3～9は分類不可能な石材であるが、加工痕があるため図示した。いずれも風化・磨耗が著しい。4は左・下側面及び底面にノミ痕見られる。方形に加工するのが目的か。

古代・縄文時代遺物 (第18図)

1は土師器杯の口縁部片である。2は土師器壺の肩部片。3は凝灰岩製砥石である。裏面は剥落しているが、表面と両側面に使用が認められる。時期は不明である。

4～23は縄文土器の破片である。撚糸文系・条痕文系の早期に帰属する土器を主体としている。拓本について、内面の残りが良いものは図示した。4～10は無文土器である。9は口縁部片であり沈線が回る。11・12は条痕文である。13～22は撚糸文である。15は胴部下半の破片であるが、砲弾形を呈する夏島式の特徴をよく表している。23は加曾利E式であり、胴部施文の沈線が見られる。本調査における唯一の中期の土器である。24は頁岩製の石鏃。25は砂岩製の礫器であり、使用面のみ調整されている。



第18図 遺構外出土遺物(6) 古代・縄文

第6表 遺構外出土遺物観察表(4) 古代・縄文

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(12.8)	-	-	ABGN	橙色	B	口縁部片	
2	土師器 壺	-	-	-	ABIN	灰褐色	A	肩部片	
3	砥石	残存(最大長 4.9 cm、最大幅 3.5 cm 最大厚 2.7 cm)、重量 60 g、凝灰岩製							
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	橙色	B	胴部片?	無文
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEIN	にぶい黄褐色	B	胴部片?	無文
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADN	にぶい赤褐色	B	胴部片?	無文
7	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADN	にぶい赤褐色	B	胴部片?	無文
8	縄文土器 深鉢	-	-	-	AGINO	にぶい黄橙色	B	胴部片?	
9	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEN	にぶい赤褐色	B	口縁部片	無文 口縁部に沈線が回る
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIN	橙色	B	底部片	無文
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEN	明赤褐色	B	胴部片?	条痕文
12	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIN	明黄褐色	B	胴部片	条痕文
13	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIN	にぶい橙色	B	胴部片?	撚糸文
14	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDGIN	にぶい黄橙色	B	胴部片	撚糸文 RL単節縄文
15	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIN	橙色	B	胴部片?	
16	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDIN	にぶい黄橙色	B	胴部片?	撚糸文
17	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIKN	にぶい褐色	B	胴部片?	撚糸文
18	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIN	明褐色	B	胴部片?	撚糸文
19	縄文土器 深鉢	-	-	-	AIN	にぶい黄褐色	B	胴部片?	撚糸文 LR単節縄文
20	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	浅黄色	B	胴部片?	撚糸文
21	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIN	にぶい褐色	B	胴部片?	撚糸文
22	縄文土器 深鉢	-	-	-	AGN	にぶい褐色	B	胴部片?	撚糸文
23	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIN	にぶい褐色	B	胴部片?	沈線を施文
24	石鏃	最大長 2.6 cm、最大幅 1.5 cm 最大厚 0.3 cm 重量 0.5 g 頁岩製							
25	磔器	最大長 11.2 cm 最大幅 9.5 cm 最大厚 4.7 cm 590 g ホルンフェルス製							

V 調査のまとめ

1 遺跡について

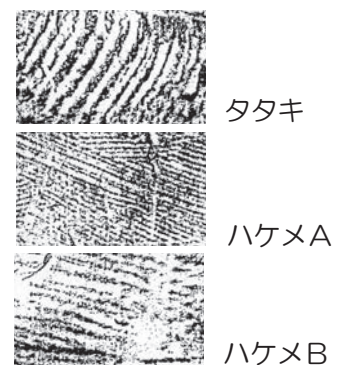
合羽山遺跡は江南台地北縁部に所在し、従来は縄文時代の遺跡と認識してきた。しかし今回の調査により、中世の墓域が広がっていることが判明した。調査区は攪乱が著しく、河原石や凝灰質砂岩と凝灰岩が散乱していた状況であった。

墓壙として確認できたのは、わずか1基に留まる。ただし、骨片の散布状況や出土した土器からは、蔵骨器として4個体を特定してもよいと考えられる。石塔の類は板碑を6基検出した。散乱していた石材について、平石は荒川や和田吉野川などから採取・運搬し、集石墓の敷石として使用したと考えられる。凝灰岩系の石材については、白色の肌理の細かい軟質凝灰岩（小江川石または福田石）と嵐山付近で散見される凝灰質砂岩である。これらは加工が容易であるため、古墳の石室の構築材として使用が知られている。また、大型で厚肉な板厚の初期型の板碑を試掘の際に表採しているが、その石材の緑泥片岩は古墳の奥壁や天井石に使用されるケースもある。さらに支谷を挟んだ北側には静簡院古墳群が所在することから、明確な痕跡は確認されていないが、古墳の石材を転用した可能性も窺える。凝灰岩系石材は軟質な石材であるためにほぼ磨耗・風化していたが、成形・調整らしき痕跡が見受けられるものが多く、石塔またはその周辺部材として使用されていた可能性がある。墓地としての構成は、自然地形を利用して台地上ではあるが周辺低地形により明確に区分された一面に占地し、平石が敷かれ区画された墓壙に、供養塔または墓標としての板碑が造立されている原景が想起される。また、板碑の様相からは初発期から継続的に供養・埋葬の場として使用されていたことが窺える。残念ながら、墓域としての埋葬を開始する時期は明確にし得なかった。

2 羽釜について

観察結果から得られた痕跡を元に製作手順を考察してみる。

- ①成形 不明。破碎状況を観察すると割れ方が螺旋状に見受けられるため、粘土紐で作られた可能性がある。
- ②口唇部 ナデによる仕上げ。
- ③内面 底面をハケAで羽釜を回転させながら細かく整形の後、体部をハケBにて横位に回転させて整形。
- ④外面 体部をハケAで右回転、続いて左回転で整形した後、タタキで器形を調整、または底面をハケBにて整形する。体部タタキと底面ハケの前後関係は不明。
- ⑤鏝 体部のタタキ後に接合した後、鏝上面・下面の整形。
- ⑥口縁部 鏝も含め、調整痕のナデ消し。最後に穿孔する。
- ⑦乾燥・焼成



第19図 羽釜の工具痕

この羽釜の調整には3種類の工具を使用したと推定される。ハケA・ハケB・タタキがその痕跡に当たる。工具の使用箇所は前述のとおりだが、タタキについては鏝の接合面周辺にのみ見られ、かつ内面に当て具痕などは見られない。これは、タタキ締め要素が薄く、器形の調整と器面に凹凸を造り鏝と

体部の接着力向上を図ったと考えられる。鏝から上部はハケ痕をナデ消しているにも拘らず、下部にはハケメを残す。これは単に粗雑に製作したためではなく、意図的に残したと考えられ、内外面に細かな凹凸を造り出す事により、熱効率・保温性上げる等の機能的な要素を含んでいる可能性がある。煤の付着からは本来の使用の痕跡が窺え、二次転用したものと考えられる。羽釜を蔵骨器に使用する例は、重要有形民俗文化財に指定されている奈良の元興寺資料が著名であるが、近隣では足利市宿居館跡にて、焼成・形状等が類似した羽釜が完形で検出されており、本遺跡と同様に蔵骨器として二次転用されている。産地や帰属する時期については類例が少ないため不明な点が多い。ただし、生産地を関西方面とする流通品の可能性は指摘されている。年代については、宿居館跡の羽釜は14世紀とされている。また、関西方面の研究なども参考にすると形状の近いものは14世紀代に求められるが、他の出土遺物と勘案し13世紀後半以降に帰属する遺物として考えておきたい。

3 埋葬施設について

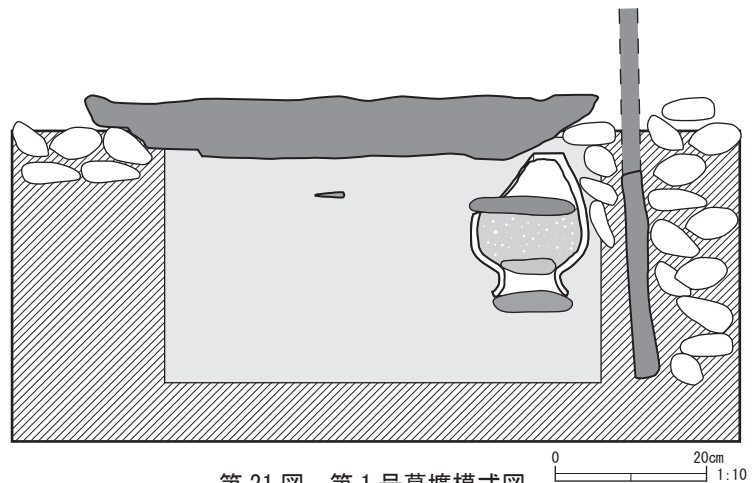
調査段階で確認された状況は、前述の通りであるが、現段階で可能性が高いと思われる埋葬施設の復原を試みたものが、第21図の模式図である。

上部施設は集石墓であり、平石を敷き区画をしていたと考えられる。平石は多くても2段詰む程度と思われる。敷石範囲・規格は不明である。埋葬部分には長方形に加工した緑泥片岩を用いて蓋をしている。埋葬部分の軸方向に合せて板碑を造立し、碑面を南側に向け、かつ斜面下方にも向けている。基部には石で裏込めをして安定を図っている。

下部については、施設と呼べるものがない。墓床はあまり深く掘り込まれず、蔵骨器が隠れる程度である。蔵骨器・副葬品は蓋石の下より検出されている。蔵骨器は底部が上を向いた、倒置の状態で出土した。口縁下に口径程の平石（第11図3）が1つ置かれ、逆さでも安定するように設置されている。蔵骨器の割口から体部内面の径に合う平石（第11図4）により蓋をされていた。さらに、内面の頸部内面も平石（第11図2）で塞がれており、納骨がこぼれることを防いでいる。蔵骨器の中からは人骨約450gが検出された。選骨されており、またいずれも原型を留めない細片であることから、蔵骨器に納められるように破砕されている可能性が考えられる。所見であるが、1体分の人骨としては量が少ないように感じられる。副葬品は小刀であり、検出状態に葬送者の作意が窺える。埋葬が13世紀前半以降と考えられるが、小刀は当該期に多い副葬品であることも墓の帰属年代を明示しているといえる。



第20図 渥美壺検出状況復原



第21図 第1号墓墳模式図

4 まとめ

この墓域の時期的な帰属であるが、蔵骨器の年代観から、13世紀前半以降から14世紀代までは継続していると推定され、板碑の様相からも同様に捉えてよいと思われる。初期型の板碑に伴う埋葬施設は見られないことから、墓域となる以前は供養の場として使用され、後に埋葬の場へと展開したと考えられる。今後の課題として、被葬者を茶毘に付した場所を検証する必要があるだろう。被葬者については、この時期の資料不足もあり想定は困難である。ただし、大型の板碑の供養塔や、流通品である渥美産や常滑産などの壺を蔵骨器として使用している点、また破片ながら青磁・白磁の検出からは、ある程度の財力が窺える。また、墓域の立地や、かつ小刀を副葬していることから考慮すると、この地域の領主層と推定され、継続的な営みからは一族墓であると考えられるのではないか。本遺跡の所在する成沢地区は、文献では16世紀以降に成澤氏と称する在地領主が確認されるが、被葬者に比定できる人物・一族を継続期間に認めることができない。

本遺跡の直近には浄簡院が所在しており、参道脇には板碑が数基安置されている。墓地拡張の際に出土した板碑である。現在の浄簡院は深谷城主上杉憲盛により天正年間に中興開基されたと伝わり、曹洞宗の文殊寺の末寺である。以前は浄簡院と称した前身寺院があり、元亀年間に堂塔衰微との口伝が文書で確認することが出来る。浄簡院の中興と本遺跡の遺物の年代は一致しない。しかし本遺跡の所在と浄簡院から出土した板碑を併せて考えるならば、浄簡院と称した前身寺院の存在が真実味を帯びてくるのではないだろうか。空想の域を脱しないが、本遺跡は浄簡院の寺域内にあり、在地領主の被護のもと運営されていたが、鎌倉末期から続く動乱期に在地領主が没落すると伴に、寺院も衰微し、墓域は放棄されるに至ったと考えることができる。

当地域は初発期の板碑が多く散見され、後に増加・拡散が見られる板碑の造立を考える上で重要な地域である。初期の板碑造立とその推進を担った仏教の動きを考える上で、周辺寺院の存在は注目に値する。今後の調査事例の増加を期待し、地域の歴史解明の進展を待ちたい。

引用・参考文献

- 浅野晴樹・服部実喜 1995 「関東」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
浅野晴樹 2003 「北関東における陶磁器流通と遺跡」『中世東国の世界 I 北関東』高志書院
新井端 2003 『江南町の板碑 江南町史 報告編1』江南町
荒川正夫・栗原真理子 2005 「埼玉県」『中世墓資料集成 関東編(1)』中世墓資料集成研究会
小川良祐 1986 『樋の上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第59集
元興寺・元興寺文化財研究所 1994 『中世庶民信仰資料』
栗原真理子 2003 「北関東の中世墓と埋葬」『中世東国の世界 I 北関東』高志書院
剣持和夫他 1998 『築道下遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第199集
江南町 2004 『江南町史 通史編上巻』
埼玉県教育委員会 1981 『埼玉県板石塔婆調査報告書』
齋藤和行他 2001 『宿居館跡発掘調査報告書』足利市埋蔵文化財調査報告書第45集
鋤柄俊夫 1995 「大阪府南部の瓦質土器生産(1)」『日置荘遺跡』(財)大阪文化財センター
土本典生 1995 『法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書』一宮市教育委員会
中野晴久 1995 「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
長谷川真 2008 「土製煮炊具からみた中世兵庫津遺跡」『兵庫津の総合的研究』大手前大学史学研究所
深谷上杉顕彰会 1996 『深谷上杉氏資料集』深谷市
『新編武蔵風土記稿』「卷之二百二十一 大里郡之三」

図 版





調査区全景（北東から）



調査範囲全景（東から）



試掘トレンチ 土層断面



第1トレンチ 土層断面



第2トレンチ 土層断面



集石部検出状況

図版 2



集石部板碑出土状況（北から）



第1号墓壙 検出状況1（東から）



第1号墓壙 検出状況2（北東から）



第1号墓壙 土層断面（北東から）



常滑焼壺 出土状況（北から）



集石部羽釜出土状況（南東から）



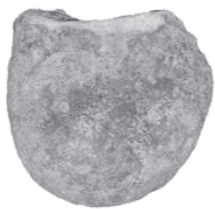
遺構外出土遺物 第13図-1



遺構外出土遺物 第13図-2

第1号墓壙 第11図-1

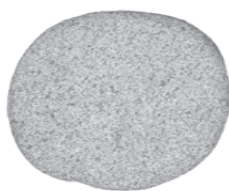
图版 4



第1号墓壙 第11图-2



第1号墓壙 第11图-3



第1号墓壙 第11图-4



第1号墓壙 第11图-5



第1号墓壙 第11图-6



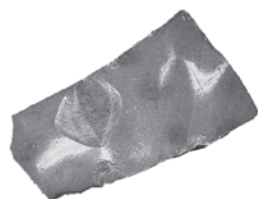
第1号墓壙 第11图-7



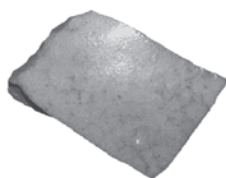
第13图-3



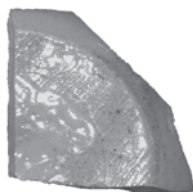
第13图-4



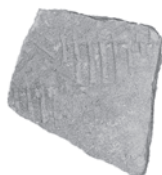
第13图-5



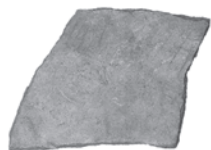
第13图-6



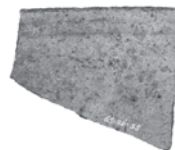
第13图-7



第13图-9



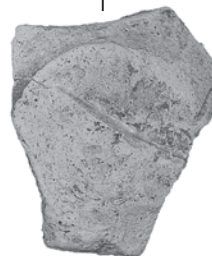
第13图-10



第13图-11



第13图-8



遺構外出土遺物



第 14 图-1



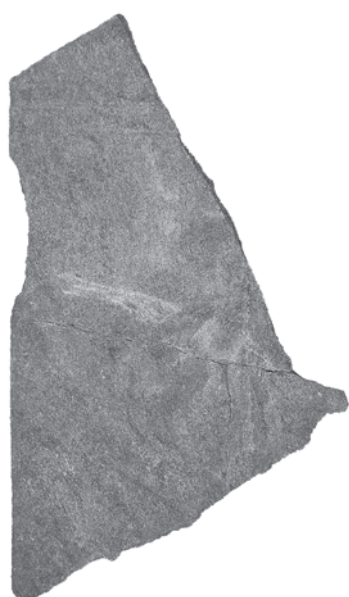
第 14 图-2



第 15 图-3



第 15 图-4



第 15 图-5



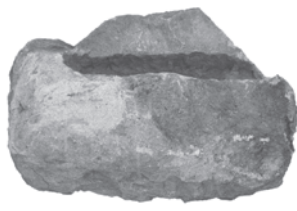
第 15 图-6

遺構外出土遺物

图版 6



第 16 图-1



第 16 图-2



第 16 图-3



第 16 图-4



第 17 图-5



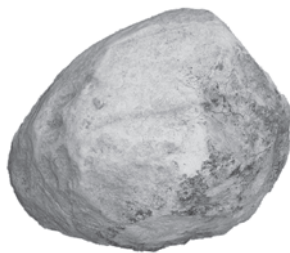
第 17 图-6



第 17 图-7



第 17 图-8



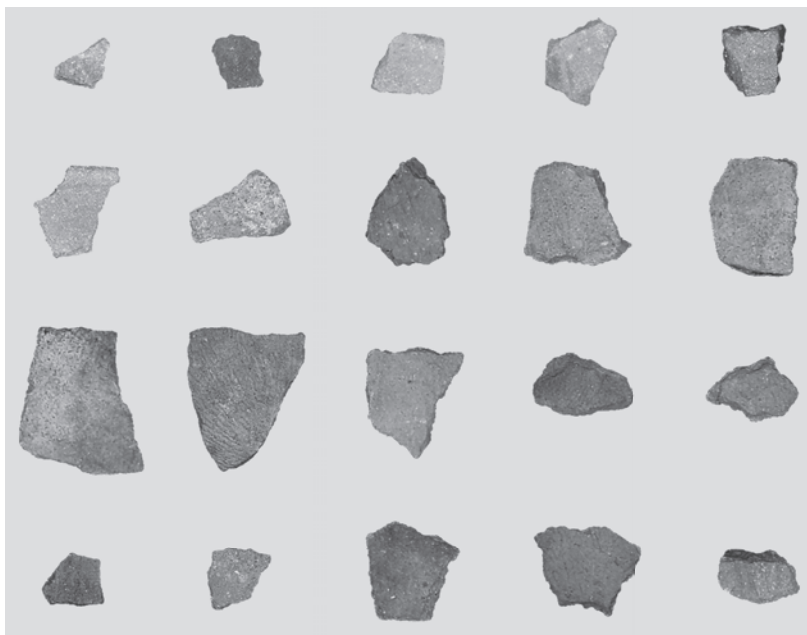
第 17 图-9



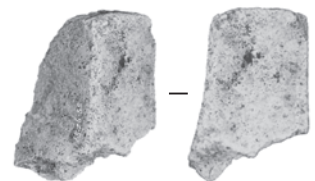
第 18 图-1



第 18 图-2



第 18 图-4 ~ 23



第 18 图-3



第 18 图-24



第 18 图-25

遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	かっぱやまいせき							
書名	合羽山遺跡							
副書名	熊谷市合羽山遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編集者名	蔵持 俊輔							
編集機関	埼玉県熊谷市合羽山遺跡調査会							
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1 TEL048-524-1111							
発行年月日	西暦2009(平成21)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(° ' ")	(° ' ")		(㎡)	
合羽山遺跡	熊谷市成沢字静簡院 前1162番他	11202	065-026	36° 06' 59"	139° 21' 00"	20080410 ～ 20080430	100	倉庫建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
合羽山遺跡	集落跡 墓跡	縄文時代 中世	— 墓壇 1基 土坑 2基	土器・石器 陶器・磁器 土師質土器 板碑・瓦質土器 鉄製品・石製品		新たに中世の墓域が広がっていることが確認された。		

熊谷市合羽山遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

合羽山遺跡

平成 21 年 3 月 31 日発行

発 行／熊谷市合羽山遺跡調査会

印 刷／朝日印刷工業株式会社